

長崎県における複式教育の実情と附属小学校における実践事例

村田 義幸，松本 和昭，水戸 一幸，浦田 武

(長崎大学教育学部) (長崎大学教育学部附属小学校)

1 長崎県の小学生，中学生の数および学校数

平成17年度学校基本調査(速報)によると，長崎県内の学校数ならびに小学生及び中学生の人数は表1に示すとおりである。

表1 長崎県における小学校児童数，中学校生徒数ならびに学校数

区 分	学 校 数 (校)					児 童・生 徒 数 (名)				
	13年	14年	15年	16年	17年	13年	14年	15年	16年	17年
小学校	435	430	426	419	416	98,024	95,747	94,226	92,219	90,363
中学校	217	215	214	216	214	56,268	53,865	51,685	50,020	49,101

※ 平成17年度学校基本調査結果を基に作成

平成17年度の小学校の数には国立学校1校，私立学校5校が含まれているので公立小学校の数は410校である。その内，休校している小学校が県下で10校あるので，実質は分校を含めて400校である。また，中学校数には国立学校1校，私立学校13校が含まれており，現在の公立中学校の数は県立校2校を含めて199校である。

平成17年5月現在の児童数は平成16年度と比較して1,856名の減少であり，これは25年連続の減少である。国立学校及び私立学校に在籍する児童を除いた，公立小学校に通学する児童は88,839名である。また，中学生数は5万人を割り，前年度比較919名減で，これは9年連続の減少となっている。

2 長崎県における複式学級保有学校数及び複式学級数

(1) 複式学級を保有する学校数

小学校の学級編制については，学校教育法施行規則第19条「小学校の学級は，同学年の児童で編制するものとする。ただし，特別の事情がある場合においては，数学年の児童を一学級に編制することができる。」とある。また，中学校の学級編制についても，この19条が準用される。そして，公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の第三条において「公立の義務教育諸学校の学級編制は，同学年の児童又は生徒で編制するものとする。ただし，当該義務教育諸学校の児童又は生徒の数が著しく少ないかその他特別の事情がある場合においては，政令で定めるところにより，数学年の児童又は生徒を一学級に編制することができる。(以下略)」と規定し，「二の学年の児童で編制する学級」の児童または生徒の数を，小学校では16名(第1学年の児童を含む学級にあつては8名)，中学校においては8名を基準として示している。

休校中の公立小学校を除く 400 校のうち複式学級を保有する学校数は 93 校であり、県下の公立小学校の 23.3%が複式教育を行っていることになる。公立小学校以外に、国立大学法人長崎大学教育学部附属小学校に 2 学級（平成 18 年度に高学年複式学級を開設する予定であり、来年度は 3 学級となる。）、諫早市内小長井町にある私立聖母の騎士小学校に 3 学級開設されている。

中学校については、長崎市に 4 校（土井首中学校開成分校、伊王島中学校、高島中学校、池島中学校）五島市に 4 校（嵯峨島中学校、久賀中学校、蕨中学校、椛島中学校）、松浦市に 1 校（青島中学校）の計 9 校に複式学級 9 学級が編制されている。長崎市内の 4 校について、土井首中学校開成分校は、長崎県の児童自立支援施設開成学園に開設されている土井首中学校の分校であり、伊王島、高島、池島の 3 校は、市と町の合併により平成 17 年度から長崎市立となった中学校である。いずれも、炭鉱の町として栄えていた町の学校であったが、炭鉱閉山後は急激に人口が減少し、今日では過疎地となっている島嶼部にある中学校である。また、五島市の 4 校も福江島本島の属島である久賀島、嵯峨島、椛島という人口の減少の著しい地域に在る学校であり、また、松浦市立青島中学校は松浦市の沖合約 6.5km、伊万里湾の入り口に浮かぶ農業と養殖漁業を中心とした第一次産業中心の島に在る小学校と併設の中学校である。

表 2 は、公立小学校における複式学級について、地域別にまとめたものである。表中複式学級数欄の各地域上段は、「75 条学級」も含めた各地域の全学級数に占める複式学級数の割合を示したものである。対馬市(22.4%)、北松浦郡(20.0%)、新上五島町(16.7%)、五島市(15.4%)、平戸市(15.3%)と、島嶼部に多いことが分かる。しかし、長崎県の複式教育について語られるとき、島嶼部の学校が注目されがちであるが、雲仙市や南島原市の山間部の学校にも焦点をあてることを怠ってはならないことが分かる。

(2) 小学校における複式学級の編制

186 の複式学級の内、3・4 学年(中学年)の学級数が 65 学級(34.9%)と最も多く、次いで 5・6 学年(高学年)の 60 学級(32.3%)、1・2 学年(低学年)の 30 学級(16.1%)の順となっている。学校の事情によっては、2・3 年学級(16 学級)や 4・5 年学級(8 学級)という変則複式学級を編制しなければならない場合もあり、とび学年複式学級も 6 学級編制されている。2・3 学年の変則複式学級では、2 学年では生活科の授業があり、3 学年では総合的な学習がそれに変わる、また、4・5 学年の変則複式学級では、5 年生で家庭科が新たに加わるなど、教科指導上の困難が生じる恐れもある。

現在の複式学級は 2 個学年で編制されているが、過去には 3 個以上の学年での編制や全ての学年の児童を 1 つの学級に編制する単級と呼ばれる学級も存在していたが、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」の

表2 地域別に見た長崎県の複式学級数（平成17年度児童・生徒数から作成）

地 域	複式学級 保有校数	複式学級数	二つの学年の組み合わせ					
			1・2年	2・3年	3・4年	4・5年	5・6年	その他
長崎市 24,371名	8校	17(1.9%)	3学級	1学級	8学級	0学級	5学級	0学級
		891学級	19名	14名	82名	0名	52名	0名
佐世保市 14,744名	7	14(2.7%)	2	0	6	0	6	0
		516	11	0	59	0	50	0
大村市 6,241名	2	4(2.0%)	1	0	1	0	2	0
		205	4	0	14	0	22	0
平戸市 1,965名	8	18(15.3%)	3	1	7	1	6	0
		118	17	10	67	16	72	0
松浦市 1,705名	3	6(7.0%)	1	1	2	0	2	0
		86	8	13	16	0	17	0
対馬市 2,370名	18	35(22.4%)	6	3	13	0	11	2(3・5,2・4)
		156	36	26	121	0	93	12
壱岐市 1,976名	4	10(7.8%)	3	1	3	0	3	0
		128	5	0	8	0	7	0
五島市 2,735名	11	23(15.4%)	5	0	8	0	7	3(1・3,4・6)
		149	28	0	80	0	57	10
西海市 1,992名	4	7(6.1%)	1	0	3	0	3	0
		115	3	0	15	0	27	0
雲仙市 3,227名	5	6(3.3%)	0	1	2	2	1	0
		181	0	15	10	26	6	0
南島原市 3,206名	10	19(10.8%)	1	6	4	1	6	1(4・6年)
		176	8	65	32	16	64	4
東彼杵町 540名	2	3(11.1%)	0	1	0	1	1	0
		27	0	10	0	14	11	0
新上五島町 1,601名	8	17(16.7%)	3	1	6	2	5	0
		102	13	15	46	31	31	0
北松浦郡 289名	3	7(20.0%)	2	0	2	1	2	0
		35	9	0	15	2	11	0
計	93	186	30	16	65	8	60	6

注1 平成17年度長崎県児童・生徒数資料を基に作成した。

注2 平成18年1月に実施された市、町の合併による新市に基づいて作成した。

注3 南島原市は、平成18年3月31日に発足するが、合併予定の町を合計して作成した。

注4 北松浦郡の3校は、小値賀町立小値賀小学校大島分校と小値賀町立斑小学校、宇久町立

神浦小学校である。宇久町は、平成 18 年 3 月 31 日に佐世保市と合併が予定されているがこの資料では北松浦郡として集計した。

改正とともに複複式学級は認められなくなり、1974 年以降は 2 個学年による複式学級が編制されている。

3 複式教育実践上の諸課題

長崎大学教育学部附属小学校では平成 16 年 4 月に 1・2 学年の複式学級を創設し、その年度の初等教育研究発表会において「第 1 回複式教育について語る会」を開催した。引き続き、平成 17 年度には 3・4 学年の複式学級を開設するとともに、「第 2 回複式教育について語る会」を開催した。第 1 回、第 2 回ともに百数十名の参加者とともに、複式教育のあり方について熱心な協議が展開された。また、教育学部の教員や附属小学校の副校長、複式教育室の教員を中心に県内あるいは他県の学校を訪問し、複式教育に関する研鑽を深めてきた。そのなかで多くの教師、学校関係者から訴えられた課題の幾つかについて述べてみたい。

(1) 教科等の指導にかかわる課題

複式学級での学習は、異学年の児童が同じ教室で学習を進めていくのであるから、指導方法の工夫が必要となる。教科等の特質を考慮して適切な指導方法を採用していくことになる。児童の発達段階や教科における系統性を重視した学習指導を考えるならば学年別指導を行うことになるが、その際の「ずらし」や「わたり」のあり方を工夫する必要がある。あた、間接指導において児童一人ひとりが自力解決に取り組んでいるとき、教師はもう一方の学年の直接指導に当たっており、子どもをつまづきやつぶやきへの支援が十分にできるのかが問題となる。間接指導の充実も重要な課題となっている。

逆に、同単元指導を行う場合、例えば、AB 年度方式をとる場合、転出入、あるいは教科書等の変更などによる未学習の問題が発生するおそれがある。逆に、既に学習している内容を再度学習する場合も出てくる。これは繰り返し案の指導でも言えることであり、学習意欲に影響することも考えられる。教科等の指導にかかわる課題については、①間接指導の充実にむけた子供たち同士の学び合いのあり方、②子どもたちの多様な考え方を開き合い、練り合い；高め、深め合うための手だて、③集団での学習が必要な内容についての工夫、④2 つの学年の児童数が大きく異なるために、一方の学年の指導に時間がかかってしまう、⑤課題作りや学習材の準備等に 2 学年分の量をこなさなければならない、⑥基礎学力の定着が困難などの課題があげられる。ガイド学習、集団学習、合同学習などについての研究を深める必要もある。

(2) 教科外の指導にかかわる課題

特別活動や生活指導に関連した課題も多い。①特別活動等で活動計画を実践する場合、子供一人ひとりの役割分担が多くなり負担が大きい、②学校行事などで

家庭や地域の協力なくしては実施が困難である，③掃除などでの子供たちの負担が大きい，④学級活動その他の話し合いにおいて新しい意見や考えが出にくく「例年通り」で進めていく傾向がある，⑤クラブ活動では，少人数のために1クラブしか編成できない，⑥教師が手をかけすぎてしまい，子供の依頼心を強めてしまう傾向がある，⑦友人関係が固定化し，また濃厚になる傾向がある。集団内での地位の固定化，遠慮して自己主張をしない，競争心が育たない，視野の広がり不十分で柔軟性にかけるなど社会性の発達不十分になりやすいなどの傾向が，複式学級を担当する教師から指摘される。かかる課題に対処する努力が必要となっている。

(3) 学校運営，教員研修にかかわる課題

複式学級を保有する学校では，①教員数が少ない，②事務職員が配置されていないために教頭の負担が大きくなる，③校務分掌が多岐にわたり教職員の多忙感が強い，④研修のための出張にもなかなか行けない，⑤各種行事を実施する際に全職員全児童で事にあたらなければならないなど，学校運営上の困難は多い。また，極小規模校の不利な点を補おうとして他校との交流学习を計画する場合にも近隣に学校が少なく，交通費などの経費の面で苦慮することもあるなどの問題もある。今日の学校においては組織として多くの教育上の課題を解決していかなければならないし，学校内の研修を通して教員としての資質や能力の向上を図る，さらには，教員相互の関係の中で心身の健康の維持・増進を図ることが必要となっている。多くの学校では，良好な対人関係の中で子供たちの成長発達を支援するための資質や能力の高める努力をしているのであるが，やはり教員の数の少なさが問題となる。長崎県では複式教育支援講師を派遣する制度を活用しているが，派遣される講師の数は必要とする数の1/3程度であり，また，継続して派遣されるわけではない。学習指導案や学習財の作成を含め，複式学級を担当する教員を組織的に支援する必要がある。県や市の教育センターによる支援，定期的に開催されているへき地教育研究会等の研修機会などとともに，教員養成を目的としている大学学部における養成段階での取り組みや研究体制の整備と学校への支援を充実していくことが必要である。

(4) 社会教育施設にかかわる課題

情報機器の発達やメディアの発達は，情報に関する地域差を大幅に縮小したといえる。遠隔教育を実施することで，多様なものの見方，考え方を開き合うことも可能になってきている。しかし，図書館，美術館その他公共施設などが地域にないことの不利は大きい。移動図書館，修学旅行の活用などいろいろと工夫はされているが，この課題を克服することも大切である。保護者の学習意欲を高め，子供たちとともに学ぶことができる環境を作っていくためにも生涯学習の場を地域の中に作る工夫をする必要がある。

今回は、複式教育が抱える課題を中心に述べたが、複式教育のよさを生かしていくための取り組みを積極的に進めていかなければならない。長崎大学教育学部附属小学校での複式教育研究の取り組みはまだ始まったばかりであり、意図的に作られた複式学級という場でのことではあるが、複式学級のよさが着実に生かされてきている。保護者の理解と協力を得るための努力には厳しいものがあるが、着実な成果を直接感じ取っていただくことで大きな理解と協力がさらに得られるものと信じている。さらに研究を深め、地域の教育の中に生かされていくことができれば幸いである。

4 長崎大学教育学部附属小学校における複式教育

600 余もの多くの島をもつ長崎県の地理的な条件と少子化による児童数の減少に伴い、複式学級は増加する傾向にある。北海道、鹿児島県に続いて複式学級の多い長崎県にある教育学部附属学校として、「複式学級での効果的な学習指導の在り方を組織的かつ専門的に追究していくことが必要である」との考えから、平成 16 年度に低学年(1・2 年生)、平成 17 年度に中学年(3・4 年生)の複式学級を開設した。そして、平成 18 年度には高学年(5・6 年生)の複式学級を開設する。各学級の児童数は、低学年も含めて 16 名(各学年 8 名、男女各 4 名)である。

複式教育には、多くの課題があるが、組織的に研究を深めることで、2 個の学年が共に学び合うことのよさを高めていくこと、ならびに、その成果を公表することを通して長崎県を始め、広く教育の場へ貢献することを目指して研究の緒についたばかりである。

(1) 学習面における実践

複式学級の指導形態としては、それぞれの学年別に学習を進める学年別指導と、2 つの学年で編制される学級を 1 つの学級とみなし、2 学年同一の学習をする指導形態(4 下位類型に細分される)に大別される。本校では、複式学級を創設するに当たり、児童が複式学級に在籍する期間は原則 2 年とすることでスタートした現状を踏まえ、各教科等の指導を表 3 のように実施している。

表 3 本校における各教科等の学習指導形態

学年	学年別指導	AB 年度方式指導
低学年 (1・2 年)	国語, 算数, 生活科	国語, 社会, 算数, 理科 北斗の子体夢(総合的な学習の時間)
中学年 (3・4 年)	音楽, 図工, 体育, 道徳, 学級活動	音楽, 図工, 体育, 道徳, 学級活動

平成 17 年度の本県初等教育研究発表会において公開した低学年「算数」の指導案を学年別指導例、中学年「道徳」の指導案を AB 年度方式の指導例として示す。なお、学習指導において、本年度より複式教育支援講師を 1 名配置した。

(2) 対人関係づくり

算数科学習案

平成18年2月10日(金)至10:50
 授業者 学籍担任 水戸 一幸
 複式支援講師 内田 香

自 10:05

第1学年A組

I 単元 20より大きいかず

II 学習の組織

- 単元の目標
- 身の回りの数量に関心をもち、数を進んで用いようとする。
 - 数の構成に着目し、同じ大きさをまとめながら個数を調べようとする。
 - 位取り表や数直線を用いて数系列を明らかにし、順序や大小を判断することができる。
 - 十進位取り記数法による2位数と3位数の表し方が分かる。

- 子供の実態
- 子供は、1学期の「10までのかず」の単元において、並べ方や唱え方を理解し、数の構成や書き表し方を学習してきた。2学期の「20までのかず」の単元では、20までの数の唱え方や書き表し方を理解し、足し算と引き算の計算を行うことよって、20までの数の数に引き算の概念を深めている。
 - 日常生活の中で、20をこえる数を用いたり、表現したりする経験を積んできているが、数の構成や十進位取り記数法を十分に理解していない。

- 教師のかかわり
- 20を超える数に対する疑問や欲求を抱くことができるよう、単元初めにカレンダラーを用いた活動を設定する。
 - 数理解・獲得場面では、2位数と3位数の表記法や順序・大小を判断することができるよう数直線や図を用いた活動を設定する。
 - 単元終末においては、獲得した数理解の有用さを実感することができるように、「カードとり2」という活動を設定する。
 - 本時においては、最初の直接指導において、トランプを用いた活動を行い、枚数の分かれやすいや数え方に着目できるようにする。
 - 一回目の直接指導においては、10ずつまとめることのよさを全体に広げることにより、十進位取り記数法による2位数の表し方についての理解を図っていく。また、追究活動や練習問題に取り組み過程では、円滑に進めることができるよう、複式支援講師がかかわりをもつ。

第2学年A組

I 単元 10000までの数

II 学習の組織

- 単元の目標
- 10000までの大きい数に関心をもち、進んで数を読んだり書き表したりしようとする。
 - 10000までの数の表し方を、既習の1000までの数の仕組みから類推して調べようとする。
 - 10000までの数を読んだり書き表したりすることができる。
 - 10000までの数について、数の読み方や書き表し方、数の構成や系列、順序、大小などが分かる。

- 子供の実態
- 子供は1年時、「20より大きいかず」の単元で、100までの数の並べ方や唱え方を理解し、数の構成や書き表し方を学習してきた。2年生の「1000までの数」の単元では、1000までの数の唱え方や書き表し方を理解し、10まとまるという十進法の考えを基に、1000までの数の構成をとらえている。
 - 日常生活の中で、金額を表す際に4～5桁の数を読んだり書き表したりしている子供もいるが、数の構成や十進位取り記数法のよさを十分理解していない。

- 教師のかかわり
- 10000までの数に対する疑問や欲求を抱くことができるように、単元初めに「数え棒つかみ取り」という活動を設定する。
 - 数理解・獲得場面では、数の構成や加法・減法の仕方を明らかにするために、丸図や位取り表を用いた活動を設定する。ことができ
 - 単元終末においては、獲得した数理解のよさを実感することができるように、「つかみ取り2」という活動を設定する。
 - 本時においては、最初の直接指導において、単元初めに用いた数え棒の点数を表すよう投げ掛け、数の表し方や唱え方に着目できるようにする。二回目の直接指導においては、空位がある場合の点数の表し方を考える場を設けるとにより、0を用いて表すこととよさを考えるようにする。また、練習問題や追究活動に取り組み過程では、円滑に進めることができるよう、複式支援講師がかかわりをもつ。

Ⅲ 第1学年・学習計画 (全12時間)

計画立案	／	数理追究	↓	数理獲得	／	数理活用							
1	20より大きな数と出会い、学習計画を立てる。 ○ カレンダーを用いた活動を基に、100までの数の読み方や書き方に対する疑問や欲求から学習計画を立てる。 (1時間)	2	20より大きな数の数え方と唱え方について調べる。 ○ 「カード取り」の仕方を知り、枚数を数える。 ○ 枚数の分かりやすい数え方や見方を考える。 ○ 10の位、1の位を知る。 (1時間)	3	100までの数の書き方について調べる。 ○ 枚数の知らせ方を考える。 ○ 数字で表す方法を知る。 (1時間)	4	100までの数の大小について考える。 ○ 数の大小について考える。 ○ 数の線の必要感を抱く。 ○ 適用問題を解く。 (4時間)	5	99までの数の順序、数列について調べる。 ○ 100までの数の大小を調べる。 ○ 数字カードを大きい順に並べる。 ○ 位に着目しながら比べればよいことに気付く。 (1時間)	6	100までの数の順序を調べる。 ○ 10×10の方眼紙を見て、気付きを出し合う。 ○ 100までの表を完成する。 ○ 表を見た気付きから、100までの数の順序をとらえる。 (3時間)	7	「カード取り2」を行う。 ○ 「カード取り2」を行う。 ○ 自己の高まりを実感する。 (1時間)

Ⅳ 第1学年・評価

	関・意・態	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
第1時	○			
第2時				○
第3・8・9～12時			○	
第4・5・6・7時		○		

Ⅲ 第2学年・学習計画 (全8時間)

計画立案	／	数理追究	↓	数理獲得	／	数理活用							
1	「つかみ取り」を行い、学習計画を立てる。 ○ 「つかみ取り」の仕方を知り、点数を表す。 ○ 合計点数を求め、紹介し合う。 ○ 合計点数を求め、活動の中で生まれた疑問を基に学習計画を立てる。 (1時間)	2	10000までの数の書き表し方を試す。 ○ 紹介し合った方法を試すことで、1000を超えるの数の書き表し方、それぞれのよさと問題点を実感する。 (1時間)	3	10000までの数の書き表し方を考える。 ○ それぞれの根拠を基に、10000までの数の書き表し方が分かる。 ○ 十進位取り記数法の仕組みのよさをとらえる。 (1時間)	4	10000までの数の唱え方と書き表し方を理解する。 ○ 10000までの数の書き表し方や唱え方が分かる。 ○ 0を用いて表すことのよさに気付く。 (1時間)	5	10000までの数の相対的な大きさや構成を理解する。 ○ 10や100などを基にして、10000という数の相対的な大きさや構成が分かる。 ○ 1,10,100,1000を基にして、10000までの数の構成を理解する。 (2時間)	6	10000までの数の系列、順序、大小について理解する。 ○ 数直線を目盛りを読んだり、数を表したりする。 ○ 4位数の系列や順序や大小が分かる。 (1時間)	7	「つかみ取り2」を行う。 ○ 10000までの数を唱えたり、書き表したりする。 (1時間)

Ⅳ 第2学年・評価

	関・意・態	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
第1時	○			
第2・7時			○	
第4・8時				○
第3・5・6時		○		

- この開き合いを通して、
- ・10が揃ったことを通して、
 - ・10の東と、東にできなかったことを通して、
 - ・10の東と、東にできなかったことを通して、
 - ・10の東と、東にできなかったことを通して、

まとめ
10の東と、東にできなかったことを通して、

支 学習内容3を配布し、本時の学習内容を振り返ることができるとき、
その際、10の東を使うことよさに気付けているか。
(プリントに記入した児童に問いかける)
この視点でかわりをもつ。

学習材2
10の東と、東にないものを分ける用紙

学習材3
友達の数を入力するプリント

4 練習問題に取り組み

10

15

4 自力解決を基に、開き合いを行い、唱え方を知らせ、唱え方を知らせる。

この視点でかわる。特に、位置取りに定着が弱いと、直接指導を行う場合、開き合いが繰り返される。

担 子供の解決方法を分類し、代表を指名したり、補足説明がなから開き合いが円滑に進むことができないようにする。で唱え方や書き表し方を確認する。また、空位がある場合の書き表し方について考える場を設定し、以下のようによつてまとめ

まとめ
千百十一の順に位ごとに並べて表すと分かりやすい

- (数学的な考え方) 学習で用いたプリントの記述から評価する。
 - A 10の東を使った数え方が良いことを根拠を基に説明することができ
 - B 10の東を使った数え方が良いことが分かる。
- (10の東を使った数え方をできない子供には、事後に個別指導を行う。)

- (知識・理解) ホワイトボードへの記述や開き合いにおける発言から評価する。
 - A 十進位取記数法による四位数の表し方が分かる。
 - B それぞれの位に数字を入れ、数えることができる。
- (位取りをきちんとできなかつた子供には、事後に個別指導を行う。)

道徳学習案

自 9:00

平成 18 年 2 月 10 日 (金) 至 9:45

授業者 浦 田 武

I 主題名 勇気をもって (勇気1-④)

II 学習の組織

主題の目標

- 正しいと思ったことは、迷わないで勇気をもって行おうとする心情を育てる。

子供の実態

- 子供たちは、様々な場面での学習活動や生活を通して、自分の意志をはっきりともっている子供が多く、それを主張することもでき、学級の雰囲気としては不正を憎み、正しい行動をしなければいけないという意識は育ってきている。
- 上学年は下学年に対し、思いやりの気持ちをもちながら学級をリードし、下学年は上学年に対し、あこがれの気持ちをもちながら生活を共にしている。
- 道徳の時間においては、学年の枠をこえて、自分の考えを表出できるよさがある。
- 子供一人一人に目を向けると、自分の感情を常に優先する子供、自分なりの判断ができない子供、正しい判断ができて実行できない子供もおり、そのため主張の強い上学年の子供に流されて追随したり、注意しても分かってくれないとあきらめたりする子供もいる。
- 本主題においては、資料「ドッジボール」における登場人物の言動について考えることを通して、正しいと思ったことは、迷わないで勇気をもって行おうとする心情を高めることができると考える。

教師のかかわり

- 本主題は、「言う、言わない」に対する考えを開き合うことによって、正しいと思ったことは、迷わないで勇気をもって行おうとする心情を高めていこうとするものである。
- 異年齢の学級であるため、まず下学年の考えを表出させ、その後、上学年の考えを表出させるなど、学年差を考慮し、意図的に指名を行っていく。
 - 正しいことは勇気をもって行うことにおいて、「道徳的価値を見詰める力」をはぐくむことができるよう、子供の身近な問題を取り上げると共に、資料に関する子供の発言から課題を導いていく。
 - 子供自身が問題意識をもつことができるよう、「登場人物のその後の行動」が示されていない資料を活用する。
 - 正しいことは勇気をもって行うことにおいて、「自己を見詰める力」をはぐくむことができるよう、勇気ある言動の振り返りを、「ルールを守る」ということだけではなく、いろいろな場面での勇気ある言動について振り返ることができるようにする。

Ⅲ 本時の学習

1 ねらい

資料「ドッジボール」における明君の言動に対する考えや根拠を開き合うことによって、正しいことは勇気をもって行おうとする心情を高めることができる。

2 展開

階	子供の取組	教師のかかわり	時間
み つ	1 本時の資料に対する 関心をもつ。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学習材 1 写 真 文カード </div> <p>○ 子供が遊んでいる様子の写真を提示すると、遊んでいるときの様子や気持ちを述べてくるであろう。そこで、文カード「遊んでいてどんな時楽しいか、また、どんな時楽しくないか」について話し合うことにより、本時の資料への導入を図っていく。</p>	10
め る	2 資料「ドッジボール」 に道徳的価値を見いだ し、課題「明君は言っ た方がよいか？」を設 定する。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学習材 2 資 料 「ドッジボール」 一部改作 </div> <p>○ 資料「ドッジボール」（一部改作）を聞いた子供は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この後、明君ははどうしたのだろうか？ ・言ったのではないかな？ ・いや、言ってないと思うよ！ <p>などと述べてくるであろう。</p> <p>そこで、それらの発言を生かしながら「明君は言った方がよいか？」という課題を設定していく。</p>	
／ ひ ろ げ ・ ふ か め る	3 自分の考えや立場を 記した後、考えを開き 合うことによって、勇 気をもつことについて 考える。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学習材 3 道徳プリント </div> <p>○ プリント配布後、自分の考えや立場をその理由とともに記すように言葉掛けを行う。子供は、</p> <p>【言う】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正しいことはきちんと言わないといけない。 ・明君は目の前で見ていたのだから言うべきだ。 ・言うことがみんなのためにもなる。 <p>【言わない】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言うと一緒に遊んでもらえなくなる。 ・周りの友達もバウンドしているから。 ・言うといけないになってしまうかも知れないから。 ・言っても分かってもらえないから。 <p>【中立】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言った方がいいと思うけど、言うとも遊んでもらえなくなるし…。 <p>などの根拠を記してくるであろう。</p>	

「勇気をもって言った方がいいか。」に対する自分の見方や考え方をもちょうできたかを道徳プリントの記述から見取っていく。自分の立場や根拠がもてない子供には、これまでの経験を想起できるような言葉掛けを行い、子供自身が考えを明らかにできるようにかかわっていく。【道徳的価値を見詰める力】

20

その後、それぞれの考えを開き合う場を設ける。その中では、それぞれの根拠を大切にしながら、立場の違いが明らかになるよう意図的に指名したり、発言を板書したりしていく。その際には、学年差を考慮し、まず下学年の子供から発言させ、その発言を聞いてどのように思うかという視点で上学年に発言させる。

さらに教師は、ルールを守っていないのに黙っていてもよいのか、また、本当に言えるのかというゆさぶりを掛け、勇気ある行動とはどういうことなのかを考えていくことができるようにする。

- 4 自分たちの暮らしにおける勇気のある言動について振り返る。

--- 学習材4 ---
道徳プリント

- 子供たちが、正しいと思ったことを勇気を出して行った経験をプリントに記す場を設ける。その際、「そのような自分をどう思いますか？」という視点を与えることにより、よりよく生きようとしている自分に気づくことができるであろう。

10

本時における開き合いや自分自身の暮らしを振り返ることを通して、正しいと思ったことは、迷わないで勇気をもって行うことの大切さに気付くことができたかを道徳プリントから見取っていく。振り返りが進まない子供には、その子供が勇気をもって行動していた具体的な姿を伝え、その時の気持ちなどを記すように言葉掛けを行っていく。【自己を見詰める力】

- 5 教師の話聞き、実践の意欲をもつ。

- 正しいと思ったことは、迷わないで勇気をもって行おうとする意欲をもつことができるように、教師の思いを語る。

5

複式学級を豊かな生活の場としてつくりあげていくためには、対人関係を活性化していくことが重要となる。学級内に2年齢集団が存在しているという特徴を生かし、児童が協同し、「教える―教えられる」の役割を交代しながら互いに学び合う風土をつくりあげていくことである。本校では、複式学級への所属意識を高める方策として複式学級を「A組」と呼んでいる。低学年学級、中学年学級の児童が、「自分たちはA組の仲間である」ということに誇りをもって生活できるように学校生活を組織している。また、給食、学校行事、栽培活動など様々な機会に縦割り活動を積極的に実施し、単式学級では十分には体験することのできない1年生から4年生までの異年齢集団による活動を数多く体験できるように工夫した。

- ・ **A組給食**：本校にあるランチルームを活用し、低学年及び中学年の児童32名と一緒に給食をとり、終了後には全員で遊びを行う活動を毎学期4回程度実施した。
- ・ **A組菜園ではぐくみ活動**：複式学級独自の菜園を「A組菜園」と呼び、5月の土作りからスタートし、キュウリ、トマト、ゴーヤ、かぼちゃ、ズッキーニ、大根、小豆(2種類)、へちまなど全部で10種類の野菜を栽培した。単式学級では学年単位で実施している活動を複式学級では4学年合同で実施することで、当番の責任を果たすことの大切さ、上級生への尊敬とあこがれ、下級生に対する思いやりの心などを学ぶことができた。副校長や栄養教諭も参加した栽培活動、収穫の喜び、自分たちがはぐくんだ命を食べ物としていただく体験は、A組の児童には貴重な宝となっている。
- ・ **音楽集会**：文化・芸術月間の取り組みとして実施された北斗祭（音楽集会）には1～4年の児童が一緒になって、全校児童の前で歌と表現を行った。その成果は、単式学級の子供たちや学校教職員から高く評価されるものであった。
- ・ **その他**：保護者も一緒に行った「親子遠足」、長崎市立浪平小学校との交流、合同授業などを実施した。

(3) 保護者との連携

本校で複式教育を開始するときの重要な課題の一つが、保護者の理解と協力をどのようにして得るのかということであった。これは、児童数の減少に伴って、公立学校においても複式学級を作らなければならなくなったときに必ず生じる課題である。平成17年度に交流を実施した長崎市立浪平小学校も平成18年度には複式教育を始める予定であるが、本校の複式学級と交流を進める祭に、保護者にも参加していただくことで、保護者の方々に理解と安心を提供できたのではないかと思う。

平成17年度、本校のA組では月に1回程度A組通信「ぐんぐん すてきに」を発行してきた。その内容は、取り組んでいる活動や、複式学級での学びの特徴、保護者からの便りなど多岐にわたるが、情報を共有することができるだけでなく、

連携して行動するためのよりどころともなっている。また、定期的に保護者との懇談会も開催している。

本校における複式教育研究は、まだ、その緒についたばかりであるが、教育実習において複式学級での授業実習を実施することも可能になってきた。それにあわせて、学部学生の中に卒業論文のテーマとして「複式学級」を取り上げる学生も出てきた。今後、さらに研究を深め、複式教育の充実に努めると共に、教員の養成・研修に生かしていく努力をする必要がある。

参考文献

- 1 文部省 1995 小学校複式学級指導資料算数編 東洋館出版社
- 2 文部省 1995 小学校複式学級指導資料家庭編 東洋館出版社
- 3 全国へき地教育研究連盟 2001 21世紀を拓く教育シリーズⅣ ふるさと発『生きる力』を育む教育の創造—へき地・複式・小規模学校の課題解明へのアプローチ—
- 4 全国へき地教育研究連盟 2004 新しい時代を拓く心の教育シリーズⅡ ふるさとに立ち、逞しく生きる力を育む教育の在り方 ～へき地・小規模・複式学級を有する学校の地域に根ざした学校・学級経営の実践事例集～
- 5 全国へき地教育研究連盟 2005 新しい時代を拓く心の教育シリーズⅢ 個性を生かし、確かな学力を育む教育の在り方 —教育に展望をもつへき地・小規模・複式学級を有する学校の自ら学ぶ態度・能力を身につけ、共に高まっていく学習指導の実践事例集—
- 6 濱田葉子 2006 小規模校に関する研究—複式学級の学習指導法及び人間関係— 長崎大学教育学部卒業研究
- 7 松本めぐみ 2006 複式学級の実際と課題 長崎大学教育学部卒業研究